

佐藤信雅著『源氏物語の考察』

鬼 束 隆 昭

大学の卒業論文、大学院の修士論文以来の二十余年にわたる著者の源氏物語研究の成果の一部をまとめられた文字通りの労作である。

第一章「桐壺」の叙述構成と登場人物の役割」では「桐壺」の叙述構成と人物の役割とを分析してその叙述構造を明確にし、それに基づいてこの巻に寄せた作意を探り、源語構想上に占める「桐壺」の位置を確認することを意図している。「桐壺」巻を十八段に分け、各段ごとに、「叙述考察」において、巻全部で一九〇あるとされる「文」(センチンス)をまた叙述内容によって数個に細分化して、それぞれについて「人物(誰についての叙述か)」「先行・後出の同一(類似)叙述の有無」「叙述間の因果関係」を表によって示して説明され、各段ごとに「叙述の焦点・目的」としてまとめられ、またその段の叙述の因果関係を人物別に図示した「人物別叙述構成図示」が付されている。その十八段ごとの分析・考察の結果が結論として八十項目にわたって整理されている。非常に多くのことが指摘されているので、簡単に把握しがたいが、注意されるところのいくつかをあげてみる。冒頭(一

段)から述べられる帝の寵妃愛の物語では長篇性が否定されていること、しかし、次いで(二段)男官誕生によって長篇物語の構想を示す意図がみられ、長篇物語の導入部の役割を果たし、右大臣の女御腹の一の御子の登場は長篇物語構想に基づいた人物設定と見做されること、帝・寵妃の叙述展開の目的が、熱愛生活の叙述にあるのではなく、寵妃追慕を叙することにあること、「右大臣の女御」「一の御子の女御」と呼ばれていたのが「弘徽殿」と呼称変更されたのは「藤壺」登場を用意しているためであること(八段、十四段)、藤壺宮入内を帝の寵妃追慕、宮の寵妃酷似によって導き出していること(十四段)、藤壺宮の「寵妃酷似の強調」は、基本的には、「光君」「輝く日の宮」の物語を形成してゆく為の基本設定になっていること(十四段)などが指摘され、十五段以後には「光君」「輝く日の宮」の物語を長篇物語とするための設定が様々になされていることが指摘されている。そして各段ごとの考察をもとに、桐壺巻全体について、帝・寵妃の物語と「光君」「輝く日の宮」の物語とから成り、前者は後者を導き出す役割を果たしていること、帝・寵妃の物語は、帝の寵妃熱愛の物語と、帝の寵妃追慕の物語に分けられ、後者が眼目であることが指摘される。そして、「光君」「輝く日の宮」の物語は、長篇物語のプロローグの役割を果たしており、桐壺巻は今後の物語展開を前提にし、首巻として構想・執筆・流布したものであることが結論づけられている。

一つ一つの文の意味する内容と文と文との間の連関、段ごとの内容的連関を確かめ、登場人物の設定意図をさぐるという実に辛

抱強い作業がなされており、驚嘆させられる。一九〇の一つ一つの文、十八の段それぞれによって述べられる事実とその事実によって判断される執筆意図についての著者の見解はおおむね妥当であらう。むしろ妥当に過ぎるくらい当然の指摘がなされている。

その一つ一つの文および段によって確認されたところから桐壺巻全体の長篇的性格がおのずから浮かび上ってくる。桐壺帝の桐壺更衣寵愛の物語はその「悪循環の因果関係叙述」の反復によって、長篇性を持たず巻の前半において終結する方向で叙述されているが、その中に含まれる男宮誕生とその後の成長、およびそれにかかわる人物の叙述によって長篇物語としての構想が示され、帝の更衣寵愛の叙述の中には更衣の容貌・性質等に触れるところがなく、死に臨んだ叙述の中ではじめてそれが示されるという事実によって死後の追慕を叙述することに主眼があり、それが藤壺登場を必然的にし、「光君」「輝く日の宮」の物語としての展開の幕を開くことになるというこの巻の叙述構造が明らかにされたといえるであらう。

桐壺巻については後の書き添えとする見方が根強くあるのであるが、そうかといって後の巻々と桐壺巻との結びつきを断ち切ることもできないため、高橋和夫氏のごとく、現桐壺巻の中に断層を見出して解体し、長恨歌に基づく部分抜き原桐壺を考えるとという説も生れたが、明らかにされた叙述構造はそのような仮説を無効にするということになる。

なお、著者は桐壺巻の叙述に限定した考察の結論の中に紫式部の夫宜孝の死と帝の更衣追慕の叙述との関連を指摘し、その執筆

動機や執筆時期を推定している。紫式部の伝記研究に基づいた岡一男博士の指摘に拠っていると思われるが、純粹に源語本文のみの検討の結果が示されている中で、次元の異なる問題がまぎれ込んだ印象を与える。紫式部日記や紫式部集によって知られる紫式部の経験的事実と物語の中の叙述との関連は桐壺巻および他の巻にわたるいくつかの事実を揃えて立証するのではなければ説得力を持たないであらう。

桐壺巻が「光君」「輝く日の宮」の物語として展開するためのプロローグであることを第一章で述べられているが、第二章ではその「光君」「輝く日の宮」の物語のために設定された人物として、弘徽殿・右大臣・朱雀院の三人をとり上げ、その役割を検討し、また桐壺巻の執筆順位を論じている。弘徽殿・右大臣については濡標巻、朱雀院については須磨巻までが「光君」「輝く日の宮」の物語における役割として、その間の巻のすべての叙述がとり上げられ検討されている。弘徽殿女御は帝・寵妃の物語を終結させる役割が与えられており、また「光君」「輝く日の宮」の物語を終局に導く役割——藤壺落飾と源氏退京を導く——を果たすための叙述が各巻においてなされていることを指摘する。右大臣は花宴巻以後弘徽殿と同様源氏退京、「光君」「輝く日の宮」の物語を閉幕させる役割が設定されているとする。また朱雀院の叙述は「一言で言い表せば、この物語を長篇の性格をもつ源氏の物語へ指向させる為の役割を果たしている」とし、弘徽殿・右大臣と一体となって「源氏退京須磨謫居を演出する役、即ち「光君」「輝く日の宮」の物語の幕を降ろす役」と「桐壺院の遺言に

基づくもので、源氏を都に召還し、冷泉院の御代実現の役即ち源氏の世を招来する役で、親舟から離れて一人立ちした源氏の物語の幕上げの役」を演出する人物と解している。

著者が三人の人物の役割を確認しながら常に意識にあるのは桐壺巻後記説である。桐壺巻がはじめに書かれたことは多くの証拠をあげて岡一男博士が力説されているところであるが、著者は以上の三人の人物の叙述によってそれを確かめている。弘徽殿については、特に紅葉賀巻冒頭の弘徽殿の源氏・帝・藤壺に対する悪感情、藤壺の弘徽殿を恐れる意識の叙述の前に桐壺巻の叙述が先行しなければならぬことを指摘し、右大臣については、花宴巻の源氏の心中叙述「頭中将のすさめぬ四の君」、賢木巻の「かの四の君をもかれがれにうち通ひつつ、めざましうもてなされたれば、心とけたる御婚のうちにし入れ給はず、思ひ知れとにや、この度の司召にも漏れぬれど」とあることについて、桐壺巻、帚木巻の右大臣の頭中将厚遇の叙述、特に右大臣に望まれている結婚の経緯が描かれる桐壺巻の存在の必要性をいい、また、源氏の須磨退居即ち「光君」「輝く日の宮」物語を決着させる意図により設定された臘月夜が花宴巻で右大臣六の君として登場するが、桐壺巻では右大臣女として四の君までしか記していないことから、後記なら当然そこで六の君の存在にふれていてもよいはずと指摘する。朱雀院については、賢木巻の「故姫君を引きよぎて、その大將の君に聞えつけ給ひし御心を后はおぼしおきてよろしうも思ひ聞え給はず」等の、左大臣が皇太子からの所望をかえりみず娘を源氏に副わせたことに対する弘徽殿の不満の叙述に先行する桐壺

巻の叙述がなければならぬことを指摘する。いずれも納得のゆく指摘であらうと思う。

著者は桐壺巻の分析、弘徽殿女御・右大臣・朱雀院の役割を確認して、源氏物語が、桐壺巻で「光君」「輝く日の宮」の物語として構想され、長篇物語として展開していき、三人の人物の役割は源氏帰京須磨退去という形でその物語を終結させていること、そして若紫巻でまた「紫のゆかりの物語」「明石の君の物語」として構想された物語が以後あらたに展開していくというように構造的に源氏物語の流れをとらえようとしているようである。阿部秋生氏が、源氏物語のいわゆる第一部の構造を、三つの予言の及ぶ範囲の藤裏葉巻までの桐壺十七帖、雨夜の品定めとつながっていく真木柱までの帚木十六帖の二系列によってとらえようとし、また、大朝雄二氏が「予言によって予定調和的に保たれている長篇構造ではなく」「光源氏を軸にした継続し累積する歳月を写し出すことによって長篇物語の実質が確認されている」と考え、それが葵巻からはっきり頭在化すると述べるなど、源氏物語の構造を流動的にとらえようとする試みがなされているが、それらとは異った新しい視点から著者の論が發展していくように思われる。様々の図式や表を用いて源氏物語の叙述を多角的に理解しようとしみられているので論旨をスムーズに把握することがいささか困難であり、著者の意図されるところを十分理解し得ず、見当はずれなことを述べたのではないかと恐れる。著者の御海容を願う次第である。(昭56・3 笠間書院刊 A5判三二七頁 八〇〇〇円)